

## ロシアの「インド」文化

杉本良男（国立民族学博物館）

スラブ研のお世話で、はじめてロシアに行けるということで、インド研究者としての自らに課したミッションは、ロシア正教会をふくめた宗教の現状と、ロシアにおけるインド文化とくにインド映画の痕跡をさぐることにあった。もちろん、10日間のあわただしい旅のなかで、ましてはじめてのロシアという条件のなかで、それが十分に果たされるわけではないが、何らかのてがかりだけはつかめるのではないかとひそかに期待していた。

さいわい、ハードなスケジュールのなかで、ソ連時代の苦難を経て復興をとげた修道院や教会をたずねて、その過酷な歴史に思いをはせるとともに、国を挙げての観光化のプロジェクトの進展をまのあたりにすることができた。今回は復興事業に成功した例を巡り歩いたので、とくにめだったのであろうが、そこがかつては精神病院であったり、学校であったり、あるいは敷地から舍利骨が多数出現したなどという逸話を聞くと、教条的なマルクス主義の宗教弾圧のすさまじさをあらためて認識させられた。

そして、現在はむしろ反動としてのロシア正教を軸にしたロシア・ナショナリズムの再編がめざましく進行している。破壊を免れた祭壇のイコンは、われわれを圧倒してやまない。その一方で、カザンのクレムリンでは、正教会とモスクが意図的に共存させられていた。イデオロギー対立の時代が終焉して、世界は宗教復活の時代に入ったということだけはよくわかる。どうやらことは、極端から極端へと振れているようである。

インドとソ連はかつてかなり親密な関係にあった。ネルーが指導した独立後のインドは、ソ連よりだが穏健な社会主義路線、いわゆる「ネルー型社会主義」をとり、おもに重工業と金融業などが国有化されていた。ソ連崩壊までは、世界の冷戦構造を反映して、インドとソ連、パキスタンとアメリカがそれぞれ同盟を結んで互いに対立するという構図になっていた。パキスタンは、アメリカのアジアにおける橋頭堡として国際政治のなかで重要な役割を背負わされていたのである。

そのころ、インドのエリートはあけてソ連に留学していたが、その一方でインド映画がソ連で人気となっていた。1950年代のインド映画はイタリアやソ連などのリアリズムの影響をうけた佳品が続きつぎとつくりだされていた。なかでもインド映画の王様といわれたラージ・カプールの「放浪者」(Awara, 1951)などの作品は、ソ連でも大きな人気を博した。インド映画の特徴である歌と踊りもうけいれられ、年配の人びとはいまだにラージ・カプール作品の歌をそらんじているという。また若い層には「ディスコ・ダンサー」(Disco Dancer, 1983)が大人気で、主演のミトゥン・チャクラボールティも人気があるようだ。この作品は中国でも大ヒットしたようだが、不思議なことにインドではそれほどヒットしたわけではない。これは、おなじようにインドでそれほどのこともなかった「ムトゥ」(1995)が日本では「ムトゥー踊るマハラジャ」というタイトルで公開されヒットしたのとよく似ている。

ただ、今回最後に立ち寄ったモスクワの書店の CD/DVD 売場では残念ながらインド映画を発見することはできなかった。ソ連崩壊は、インドにとっても大きな転換点で、90 年代以降のインドは欧米や日本に接近して、ロシアとの関係は急速にしぼんでいった。インド映画をみかけなかったのはそのせいもあったのであろう。その前にたまたま入ったカザン近郊の巨大スーパーの CD/DVD 店には、小さなインド映画コーナーがあった。そこにはラージ・カプールの作品が一枚とあとは比較的最近の映画がおかれていたが、インドでの大ヒット作を見つけることはできなかった。ともかく、新旧作品ということで、ラージ・カプール主演の「アナーリ」(Anari, 1959) とアニル・カプール主演の「チョコレート」(Chocolate, 2005) だけでも購入できたのは幸運であった。

この DVD をさっそく帰国してから見たのだが、ロシアでのインド映画上映のすがたをかいまみることができて興味深かった。まさに百聞は一見にしかずである。というのは、じっさいこのビデオは、字幕上映でも、映画解説でも、吹き替えでもない、解説と吹き替えの中間のようなかたちであった。つまり、タイトルロールにかぶせて、ロシア語でタイトルや出演者の紹介があり、本編でも、男性と女性が一人ずつ、それぞれ男優と女優の声を語り分けるというスタイルだからである。これは、「アナーリ」でも「チョコレート」でも共通していたので、ロシアではこのような上映のスタイルだったのだろうと想像することができた。もちろん歌のシーンでは吹き替えはない。

カザンでインド映画が手に入ったというのも、偶然とはいえないふしがある。カザンには今でもムスリムが住んでいくつかモスクがある。クレムリンには正教会とモスクがならんで建っている。モスクの近くに大きな市場があり、そこできくと果物などはかなり中央アジアのウズベキスタンなどから入ってきているということであった。またモスクでも中央アジア出身のムスリムに出会った。現在この中央アジア諸国では、インド映画がいまだに盛んで、ロシア映画と人気を二分している。ひょっとして、カザンのスーパーでインド映画に偶然めぐり合ったのには、中央アジア・コネクションのようなものがあったのかもしれない。

さらにいえば、戦乱に明け暮れるアフガニスタンや、イランなどでもインド映画は大人気である。かつてアフガニスタンでタリバーンが支配していた時代、インド映画はご法度であった。しかし、アフガニスタンの現状をよく知る人は、これからタリバーンが復活したとしても、インド映画を禁ずることはできないだろう、と断言する。これらの地域では、ヒンディー語がわからない人びともインド映画好きである。それはインド映画が型にはまっていて分かりやすく、また歌と踊りがはいるので、楽しめるからなのだという。歌と踊り、型にはまったラブ・ストーリー、ご都合主義のハッピー・エンド、などはインド映画が低俗であると批判するときの常套句である。それがインド映画を世界に広めている要因となっているわけであるから、世の中は皮肉である。

今回の調査で主催者が用意してくれた「インド」文化は、ウラジーミルのハレー・クリシュナ運動であった。その指導者兼研究者は、ウラジーミルではインドといえばあの人、

といわれるほど有名な人のようであった。ハレー・クリシュナ運動は1966年にカルカッタ（コルカタ）出身のスワミ・プラブパーダが、ニューヨークではじめた運動である。ヒンドゥー教でいうヴィシュヌ派（ヴァイシュナヴァ）、とくにベンガルで16世紀に起こった改革派ヒンドゥー教のチャイタニヤ派の伝統をひくとともに、当時のアメリカのカウンター・カルチャーの流れにのって急速に広まった運動である。

歌って踊ってハイ改宗、というスタイルは、インドでは古く10世紀ごろから「バクティ（信愛）運動」としておこっているが、現在のペンテコステ、アセンブリー、セブンスデーアドベンティストなどの新しいキリスト教的宗教運動に共通したところがある。その意味では、インド的なものと、時代背景、そして新しいオカルトの伝統などがうまく融合した運動である。現在はインド国内の主要都市に寺院が存在するが、その主力はあいかわらずアメリカ、ヨーロッパである。ロシアでも、寺院でインド人のすがたを見ることはなく、ロシア人ばかりであった。

モスクワで苦勞のすえたどりついた仮住まいのハレー・クリシュナ寺院の売店でふたたび、ロシア語版の映画やテレビドラマなどのDVDをみつけた。とりあえずサンプルとして、1961年の映画「サンプールナ・ラーマーヤナ」(Sampurna Ramayana, 1961)、NHKの大河ドラマを範にしてインドのテレビ・ドラマの概念を根本から変えた連続ドラマ「ラーマーヤナ」(Ramayana, 1987-8, Doordarshan TV)、アニメ版の「ラーマーヤナ」(Ramayana: The Legend of Prince Rama, 1993)を購入した。このうち、アニメ版ラーマーヤナは、日本インド交流40周年を記念して、世界に冠たるアニメ王国日本の協力のもとに製作されたもので、インドの子供たちには圧倒的な人気であった。この映画も、もとの英語にかぶせてロシア語のナレーションがはいる。どうやら、ロシアでのインドものの上映形態はこういうものらしいことがわかった。

この寺院の近くの巨大スーパーには、ハレー・クリシュナのメンバーが働いているカレー屋さんらしきものがあった。ロシア人は辛い食べ物が苦手なのだそうで、まったくスパイス味のしないサモサやカレーは、思い出としてはほろ苦いものとなった。ともかく、つぎにロシアを訪れるときには、スパイス持参でなければならないと痛感させられた調査旅行であった。